

# 仏教学におけるデリダの受容とその問題点（途中）

師 茂樹\*

2005年9月17日

## 1 はじめに

仏教学の諸研究におけるデリダの受容と、その問題点について論じたいと思う。

以下、便宜的に三節に分けて紹介するが、方法論的にはっきりとした境界線を引けるような区別はない。

## 2 方法としてのデリダ

Michel Mohr氏は「最近、仏教学、あるいは禅学と深く関わってきた新しい方法論」のひとつとして「ポストモダニズムに基づいているアプローチ」をあげるが、そこでデリダの方法を禅の研究に応用する研究者について紹介している（[15], pp. 154-155）。

さて、ポストモダニズムに基づいているアプローチで禅学に関わっている研究者の代表として、Bernard Faure（ベルナル・フォーール）、Steven Heine（ステイヴエン・ハイネ）<sup>\*1</sup>、Steve Odin（スティーヴ・オディン）<sup>\*2</sup>、と Dale S. Wright（デール・ライト）<sup>\*3</sup>が挙げられる。四人とも、Michel Foucault（ミシェル・フーコー、一九二六～八四）や Jacques Derrida（ジャック・デリダ、一九三〇～）を特に重視している。彼らはテキストの脱構築（déconstruction デコンストラクション、解体理論とも）という方法を仏教、とりわけ禅仏教に応用しようとする。

さらにフォーールはポスト構造主義の時代をリードしてきたとされる社会学者 Pierre Bourdieu（ピエール・ブルデュー、一九三〇～）の研究成果を活用している。ブルデューの思想に関しては、「その著作を貫く軸は、私たちの知覚や判断をさまざまな形で拘束し誘導している不可視の権力作用、すなわち《象徴支配》のメカニズムを解明することにある」という研究動機の要約ができる。それぞれの研究者により、取り上げる具体的なテーマが違うので一概に言えることは少ないが、それまで隠されてきた側面を真っ向から分析しようとする態度は共通して見られる。仏教学や禅学に、史学や、文化人類学、哲学と社会学などを導入することで、斬新な見方が生じてきていると言えよう。

フォーールは特にそうで、『頓悟のレトリック』（一九九一年）<sup>\*4</sup>の後に、続々と『仏教における性の問

---

\* 花園大学文学部専任講師; s-moro@hanazono.ac.jp

\*1 Mohr氏は[8][9][10][11]を挙げる。

\*2 [16][17][18]

\*3 [19]

\*4 [2]

題』(一九九四年\*5、一九九八年に英語版\*6)、『瑩山紹瑾の幻想世界と権力との関わり』(一九九六年\*7)などを発表している。この批判的な研究成果が、欧米の禅研究に計り知れない反響を呼んでいることは、もはや確実である。ところが、フォールの最近の著書に対する厳しい書評\*8が示しているように、デリダの文学評論と同様、実地から離れた想像だけの仏教批判になりかねないことも指摘される。

Faure の研究対象は、近年特に中世日本の仏教を中心とした諸宗教の問題へと移ってきており、その中でもデリダやブルデューが引用されている ([7] など)。

### 3 仏教とデリダの比較思想

仏教学において、デリダを利用した研究として最も多いのがこれである。

基本的には、仏教思想とデリダの哲学とを比較し、その等質な部分を見いだすことを目的とするようである。それによって、例えば、仏教思想の現代的価値を確認しようとしたりする。

すでに一部を紹介したが、海外では比較思想・比較哲学的な研究は日本と比較してたいへん多い。

日本では、森本和夫氏によると、デリダは来日時に「仏教思想、道元の禅、こういったものがすでに〈脱構築〉なのだ、と日本人に言われることがよくあります」と発言したそうである ([25])。「日本人」のこのような思考方法は、西洋近代と接触して以来、アジアの各地でしばしば繰り返されてきた考え方と同じように思われる(文脈が正確に分からないのでデリダの発言の趣旨からは外れているかもしれないが)。現代の「仏教はそもそもエコロジーだった」という研究と同じ雰囲気を感じる。

ロラン・バルトやメルロ＝ポンティらの日本への最初期の紹介者であり、また道元『正法眼蔵』や禅に関する著作も多い森本和夫氏は、早くからデリダと道元との比較思想的研究を発表してきている\*9。

### 4 仏教からのデリダ批判

仏教とデリダとの比較思想研究を行う者の中には、仏教の立場からデリダの思想を批判的に検討するものもいる。

富岡久美氏は、龍樹(ナーガールジュナ)とデリダがともに同一性を批判する思想を持つという点で、「その方法の類似性が指摘されている」ことを紹介\*10した上で、以下のように述べる ([20], p. 80)。

ただし、龍樹の批判が、主観(意識の出発点としての〈わたし〉)の自己同一性をゆるがし、その根本的変容をもたらすはずのものであるのに比べ、デリダの批判は、そのような主観の自己同一性に及ぶことはない。このことは、デリダ等に代表されるいわゆるポストモダニズムの同一性批判が、すべての主観にとって同一であるはずの客観的真理が存在しないと考える懐疑主義と結びつきながら、そのいつ

---

\*5 [3]

\*6 [5]

\*7 [4]

\*8 [12]

\*9 [23][24][26] など。森本氏の仏教理解については、袴谷憲明氏による批判仏教の立場からの批判が見られる。「ヘラクレイトスの『万物流轉』と仏教の『無常』とがまったく同じと思っていた小林〔秀雄〕氏自身が『本覺思想』的通念に犯されていたからである。この小林氏の誤りの影響は大きく、同氏と同じようにフランス文学をやって道元に首を突込んだ人は、この点では全く同じ誤りを犯しているから気をつけねばならない。しかも、その誤りは、例えば、寺田透氏、森本和夫氏、栗田勇氏といった具合に徐々に強まっているので、かかる通念は一刻も早く終焉に追込まねばならないと考えるわけである。」([22], p. 303)

\*10 [1]、[13]、[14] (*Tao* の語頻出)。ただし、後に述べるように [13] はデリダの脱構築を不徹底であると論ずる。

ぼうで〈わたしにとって〉の真理を主張する相対主義の一因となっていることから明らかである。

しかし、富岡氏は、デリダのこの「不徹底」を必ずしも完全否定しているわけではないようである。氏は、別の論文で、次のように述べる ([21], pp. 64-65)。

自己を完全に否定し脱構築することのないデリダの脱構築は、ナーガールジュナの立場からすれば不徹底であるといえる。事実、他者は自己のまったき否定の契機であるかぎりにおいて〈まったき他者〉でありうるのであるし、また、この他者の他者性が自己の自己性を肯定し成立させるものであると同時に、他者と自己の関係が、そこにおいて自他の分別が成立しないという意味での同一性へと開かれ、それに支えられているところにおいてこそ〈慈悲〉(karuṇa) というものが生じうるともいえるだろう。だがそのいっぽうで、〈勝義〉が達成されるべきものとして示されているということは、〈勝義〉や〈空〉が、言語を超えた〈超越論的シニフィエ〉(signifié transcendantal) として、アルケーでありかつテロスでもあるような超本質の本質として、決定される可能性を有しているということである。これを避けるためには、〈勝義〉あるいは〈空〉は、理性がみずからを脱構築するその極限において立ち現れるものであり、それを真理として決定し、固定化しようとする理性にとっては、到達不可能な〈悪無限〉であるとともに〈まったき他者〉にほかならないことを強調しておく必要があるだろう。どこまでも言語の内部に踏みとどまろうとするデリダの脱構築は、そのことを気づかせてくれるものであるといえる。

デリダの脱構築が不徹底であるという批判は、*nonduality* (「不二元論」などと訳される) という概念によって東西の思想を比較研究する David Loy 氏の著作 ([13]) にも見られる。

## 参考文献

- [1] Harold G. Coward. *Derrida and Indian Philosophy*. State University of New York Press, 1990.
- [2] Bernard Faure. *The Rhetoric of Immediacy: A Cultural Critique of Chan/Zen Buddhism*. Princeton University Press, 1991.
- [3] Bernard Faure. *Sexualités bouddhiques: Entre désirs et réaliés*. Le Mail, 1994.
- [4] Bernard Faure. *Visions of Power: Imagining Medieval Japanese Buddhism*. Princeton University Press, 1996. Translated by P. Brooks.
- [5] Bernard Faure. *The Red Thread: Buddhist Approaches to Sexuality*. Princeton University Press, 1998.
- [6] Bernard Faure. Une perle rare: la 'nonne' Nyoi et l'ideologie medievale. *Cahiers d'Extrême-Asie*, Vol. 13, pp. 177-196, 2002-2003.
- [7] Bernard Faure. 如意尼と玉女. Online: [http://www.bekkoame.ne.jp/~n-iyana/articles/Faure\\_paper\\_resume.html](http://www.bekkoame.ne.jp/~n-iyana/articles/Faure_paper_resume.html), Dec 2004. 1999年5月にスタンフォード大学仏教研究センターで行なわれた Evans-Wentz Lectureship 「Buddhist Priests, Kings, and Marginals」における Bernard Faure 氏の発表原稿を、彌永信美氏が翻訳、構成した Web ページ。この発表は [6] として原稿化されている。
- [8] Steven Heine. *Dōgen and the Koan Tradition: A Tale of Two Shōbōgenzō Texts*. SUNY Series in Philosophy and Psychotherapy. State University of New York Press, 1994.
- [9] Steven Heine. Critical Buddhism and Dōgen's Shōbōgenzō: The Debate over the 75-Fascicle and 12-Fascicle Texts. In Jamie Hubbard and Paul L. Swanson, editors, *Pruning the Bodhi Tree: The*

- Storm over Critical Buddhism*, Nanzan Library of Asian Religion and Culture. University of Hawai'i Press, 1997.
- [10] Steven Heine. *The Zen Poetry of Dōgen: Verses from the Mountain of Eternal Peace*. Tuttle Publishing, 1st edition, 1997.
- [11] Steven Heine. *Shifting Shape, Shaping Text: Philosophy and Folklore in Fox Kōan*. University of Hawai'i Press, 1999.
- [12] Victor Sōgen Hori. Review of: Bernard Faure, *The Red Thread: Buddhist Approaches to Sexuality*. *Japanese Journal of Religions Studies*, Vol. 27, No. 1-2, 2000.
- [13] David Loy. *Nonduality: A Study in Comparative Philosophy*. Yale University Press, 1988.
- [14] Robert R. Magliola. *Derrida on the Mend*. Purdue University Press, 1984.
- [15] Michel Mohr. 禅学には方法論がありうるか？ 日本仏教学会年報, Vol. 66, pp. 149–174, 2001.
- [16] Steve Odin. *Process Metaphysics and Hua-Yen Buddhism: A Critical Study of Cumulative Penetration vs. Interpenetration*. Suny Series in Systematic Philosophy. State Univ of New York Press, 1982.
- [17] Steve Odin. Derrida and the Decentered Universe of ch'an/zen buddhism. In Charles Wei-Hsun Fu and Steven Heine, editors, *Japan in Traditional and Postmodern Perspectives*. State University of New York Press, 1995.
- [18] Steve Odin. *The Social Self in Zen and American Pragmatism*. Suny Series in Constructive Postmodern Thought. State University of New York Press, 1995.
- [19] Dale Wright. *Philosophical Meditations on Zen Buddhism*. Cambridge Studies in Religious Traditions. Cambridge University Press, 1998.
- [20] 富岡久美. 龍樹とデリダの同一性批判. 比較思想研究, Vol. 24, pp. 59–65, 1998.
- [21] 富岡久美. ナーガールジュナの悪無限 —脱構築する言説と真理—. 比較思想研究, Vol. 25, pp. 80–86, 1999.
- [22] 袴谷憲明. 真如・法界・法性. インド仏教 2, 岩波講座・東洋思想, 第 9 卷. 岩波書店, 1988.
- [23] 森本和夫. 沈黙の言語. 東京大学出版会, 1976.
- [24] 森本和夫. 『声字実相義』と現代言語論. 御遠忌記念出版編纂委員会 (編), 弘法大師と現代. 筑摩書房, 1984. 密教大系 12, 法蔵館, 1995 に再録.
- [25] 森本和夫. 正法眼蔵入門. 朝日新聞社, 1985.
- [26] 森本和夫. デリダから道元へ 〈脱構築〉と 〈身心脱落〉. 福武書店, 1989. ちくま学芸文庫, 1999.